

## 全国歴史教育協議会参加— 第3分科会に参加して —

鎌倉学園高校 風間 洋

平成29年7月26～28日まで東京都中野区の中野ZEROホールを会場において第58回研究大会が開催された。限られた紙数であるため、初日午後に参加した第3分科会(日本史)テーマ『我が国の歴史の展開を総合的に広く探求する』で発表された3本の報告について簡単に紹介する。

小村田達也(宮城県・泉館山高)の「歴史的思考力を育む授業を目指す～巡検・考査・アクティブラーニング～」は、難関大学を目指す進学校であった前任校での仙台城跡巡検、記憶復元の定期考査からの脱却、アクティブラーニングの授業導入、この3点の実践報告である。進学校の生徒の中には「要領よく」歴史用語を暗記し、「卒なく」テストの点数を取ってしまう生徒が多い。しかし、彼らは決して歴史の授業を「楽しんで」「考えて」取り組んでいるわけではない。こうしたいわゆる「歴史の成績の良い」生徒に対し、報告者が歴史的思考力をあらゆる場面で「問い続ける」工夫を行っている姿には頭が下がる思いがした。3事例はいずれも内容豊富で、限られた時間内で報告するのは、厳しかったが、自分の勤務校も大学進学を目指している生徒が多いので、改善の余地があることを痛感した。

豊田 基裕(東京・田園調布高)「地域教材(東京都大田区)を生かす実践～新田開発と六郷用水」は、勤務校周辺の史跡巡検を行うにあたって、近隣の博物館学芸員と連携して授業を組み立てていく実践報告であった。「博・学連携」という言葉が叫ばれて久しい。小・中学校と博物館の連携は、かなり進んでおり、共同でワークシートや教材開発をしている実践報告も多い。これに対し、高校と博物館との連携は、立ち遅れていると言わざるを得ない。ある学芸員によれば、世代別に統計をみると高校生の博物館の入館者数が一番少ないという。小中学校の時に利用しても高校生になると、すっかり博物館から足が遠のいてしまっている。これは、博物館側の高校教育へのアプローチ不足もあるが、高校教員側にも問題があろう。地域資料の宝庫である地元博物館・資料館と、それに勤務する学芸員の専門知識を「利用(良い意味で!)」しない手はない。

中村 修(東京・石神井高)「浮世絵から多角的に考える江戸時代の文化と都市としての江戸の特異性」は、東京都設定科目「江戸から東京へ」(2単位)の実践報告で、浮世絵が当時の庶民に人気を博した理由を考察させ、「文化史の中での江戸の特異性」を理解させるという内容であった。受験科目ではなく教養科目として設定しており、和やかで活発な意見交換をしながら授業が進められている様子に好感が持てた。関心が高まった理由として東京都(江戸)を教材とするため、生徒も土地勘があり身近な地域であること、ICTを通じて浮世絵などの図や地図などを多く提示し、視聴覚に訴えるような工夫を心掛けたことを挙げられていた。翻って神奈川県でも、「近現代と神奈川」「郷土史かながわ」等の副読本があり、科目設定されている。これを限られた授業時間の中でどう取り入れるか、苦労されながら各教員は勤務校周辺の地域教材を活用した取り組みをされており、実践報告もうかがう機会も多い。しかし、どうしても単発の実施に止まっている現状であるため、これらの実践報告を神奈川県域の全教員が容易に共有できることが大事だと思う。学校の枠を超えた教員の連携はますます大事になってくると思った。

日々の業務の煩雑さに忙殺されてしまう昨今、教員個人で行う教材開発や研究は、すでに限界になりつつある。この大会に参加するメリットは、全国の歴史教育の研究成果を得られることはもちろんだが、それ以上にこうした厳しい勤務状況下でも頑張っている全国の教員仲間から無言の「勇気」や「共感」、「元気」等を貰えることである。公務多忙の昨今ではあるが、神奈川県教員にもこの大会に積極的に参加していただき、是非全国の教員仲間の熱気を貰ってきて欲しいと思う。